北海道高体連空知支部　テニス専門部

REFEREE 通信

2008.3.18.　文責：佐々木雄介

第７号

誤審の話

「迷わず自信を持ってコールしなさい。判断が難しいこともあるに違いない。しかしそこでためらったり、自信のないコールをしていては一生懸命やっているプレーヤーがたまらないのだ。自分の判断を信じることもできない者のジャッジを、他人がどうして納得できるというのだ。自信を持ち、大きな声でコールすることは、プレーヤーを納得させ、安心させて、良いプレーを引き出す上でも大切な意味を持っている・・・・・」

アウトかインか自信が持てない場面があるのに、そんな時にも「自信を持ってコールしろ」だって？・・・・・矛盾してない？

ウインブルドンでは、チェアアンパイア（主審）の他に７名のラインアンパイア（線審）がコートを囲みます。高度な訓練を受けて資格を取った国際審判員です。それでも誤審は起きてしまうのです。幸いなことに空知支部の大会にはロディックやヴィーナスが出てきて目にもとまらぬサーブを打つことはありません。でもたった２人の審判で裁かなければならないのですから、やっぱり誤審は避けられない・・・・・。そして、テニスのルールでは、審判が下したアウトとかイン（これを事実問題と言います）のジャッジに対して、プレーヤーは絶対に異議を申し立てることができないことになっています。

・・・・・「それじゃ、泣き寝入りかよ」・・・・・おっしゃる通り、泣き寝入りをしていただくほかありません。それがテニスのルールですから。

それほどまでに審判の権威は高いのです。国際審判員の権威は、それを重んじるプレーヤーのモラルと、高度な訓練を受けて身につけた審判の技術によって支えられています。しかし、空知支部の審判員は学校でやる練習以外に訓練も受けていなければ、高度な審判技術もありません。にも関わらずウインブルドンのセンターコートの審判台に座るチェアアンパイアと同じように高い権威を持っているのです。それを支えるのは、プレーヤーのモラル、そして審判技術に代わる“一生懸命”です。一生懸命でない審判には権威がないということなのです。

・・・・・「だって、一生懸命やってるもん」・・・・・それはわかってますよ。でも、その一生懸命も形に表さなければ一生懸命でないのと変わりがないということです。一生懸命を形にする方法は「大きな声」・・・・・これが言いたかったのです。

プレーヤーの立場では・・・・・（誤解を恐れず言います）テニスに誤審はつきもの。審判が公平でさえあれば、仮にその誤審による有利不利が偏（かたよ）ったとしても、イレギュラーバウンドやコードボールと同じ。つまり“運”と考えるしかありません。苛（いら）ついたって、集中出来なくなるだけ。間違っても「今のがインかよ～」なんて呟（つぶや）かないで下さいね。そんな時は、私が飛び出していって・・・・・問答無用！御用だ、御用だ、CodeViolation ！